

視察・研修報告書

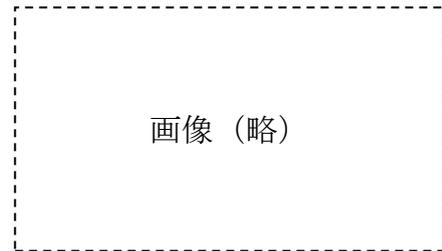
視察・研修先	第84回 全国都市問題会議 個性を生かして「選ばれる」まちづくり ～何度も訪れたい場所になるために～
日時	令和4年10月13日(火) 9:30～17:00 (第一日目)
場所	長崎県 出島メッセ長崎
内容	基調講演ほか一般報告
対応者 (講師)	下記にて表記
<p>概要</p> <p>◆基調講演◆ 「民間主導の地域創生の重要性」 株式会社ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼CEO・・・高田旭人氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テレビショッピングでお馴染みの「ジャパネットたかた」の社長で、2015年からジャパネットホールディングスのCEOである高田旭人氏が長崎市の発展に大きく関わっており、その経緯と計画等について講演された。 ・民間事業者として長崎の地域創生に取り組み始めたのは、プロサッカーチーム（V・ファーレン長崎）を通じ、通信販売だけではなく、スポーツや街づくりにおいても、会社の事業方針であるつける「見つける」「磨く」「伝える」が更に活かせるようになるようになったからであった。 ・誰も気づいていない「地域の魅力的な資源」を見つけ、それを徹底的に「磨き上げ」、全国各地に「伝えて行く」、このことが、今の通信販売の基本であるように、長崎の活性化に貢献出来ると考え、様々な長崎事業に取り組んでいる。 ・長崎を盛り上げる活性化のひとつとして、長崎市中心部に2024年開業予定の「長崎スタジアムシティプロジェクト」がある。 ・民間と行政がタッグを組み、「誰もが平等公平に恩恵を受けられる環境づくり」を目指し、長崎に暮らす方に長崎の良さを更に自覚してもらい、多くの方に「長崎は楽しそう」「長崎に行って見たい」と思ってもらうためこのプロジェクトが始まった。しかし、このスタジアムは決して観光客に向けての施設ではなく、地元の方にも、公園のように気軽に楽しみ、子育て中の家族や、ご年配の方など、幅広い方に来てもらいたいと考えている。そして最終的には長崎県内の人口が増加し、出生率も上がり、地域経済も良い方向に動き、地域への誇りや自分自身の幸福度も上昇する姿を目指している。 ・そのスタジアムでの運営アイデアとして、スタジアム内への荷物の持ち込みチェック時間の簡素化のため、「荷物の持ち込みを禁止」にし、その代わりにロッカールームを多く設置することや、駐車場の料金を変えることにした。例えば試合終了後の出庫は割高で、試合後2時間以後は割安になり、渋滞分散をさせつつ、スタジアム全体を楽しんで、賑わってもらう時間を増やすことを考えている。 	



- ・スタジアムのVIPルームも試合がない時は、ホテルとして可動出来る仕組みも取り入れる。また、隣接しているオフィスへの入居企業は長崎大学大学院を誘致予定で、大学生・大学院生・企業が入居しスタジアム内で交流を重ねられる良い環境をつくる事が出来る。
- ・その他、このプロジェクトを進める企業の代表として行政に期待していることは、周辺の渋滞緩和のための交通網の対応である。スタジアムと稲佐山間でのロープウェイの連結など「地域の活性化」をさせるために、行政だから出来ること、民間だから出来ることで、長崎をはじめ地域全体の幸福の総量を増やしていきたい。
- ・この構想に今後の長崎市の発展と期待が大きく膨らんだ。是非、2024年にも長崎を訪れたいと思う。

◆主報告◆

「長崎市の魅力あるまちづくり」
長崎県長崎市長・・・田上富久氏



- ・2007年4月より長崎市長に就任し、現在4期目の市長として観光客の増、企業誘致、平和発信、行政改革などに取組み、「長崎の魅力」について報告があった。
- ・長崎市は人口40万人の中核市で、長崎港を中心としたすり鉢状の地形で、平地と斜面市街地との独自の都市景観である。
- ・長崎市の取組みとして、「価値を見つける」視点で、2015年に世界遺産に認定された「端島（軍艦島）」が挙げられる、炭鉱を事業とした当たり前の日常であった島が、世界的な価値と認められた。その他2021年10月に開業した「長崎市恐竜博物館」も「価値を見つける」ひとつの事例である。長崎半島から国内で初めて10m級のティラノサウルスの歯の化石が発見され「長崎と恐竜」として新たな価値が見えてきた。見る角度により特別な新たな価値が誕生する良い例であった。
- ・次に「価値に気づく」として、「長崎さるく」がある。団体旅行から個人旅行に変わり、新しいスタイルの観光の先駆けとなった取組みで、長崎では「ぶらぶら歩く」ことを「さるく」と言う。何気ない路地や風景を観光客が楽しそうに散策し、興味を示している事で地域の住民も地元の魅力気づき、自分たちが中心になりガイドを行い「長崎さるく」が始まった。この取組みは何か特別なものを作ることで無く、身近にありがちな価値に気づき、成功した事例である。
- ・また、次に「価値を磨く」として、全国的に例のない「景観専門監制度」の導入がある。地域の「部分」と「全体」の関係性への配慮や、場所の歴史的価値を踏まえた考え方を広く考え、市民と協働し「市の職員だけでは気づけなかった視点」で様々なアドバイスを専門知識のある「景観専門監」が行い、駅周辺や平和公園など多くの街の開発が行われた。このことは長崎市だけでなく、本市も様々な景観に関わる施工等の計画時に取り入れることも面白いのではと思う。
- ・長崎市での取組みとして、何よりも「まちの価値に気づく」には「暮らす人」「訪れる人」の交流の中で育まれていると締めくくられているが、まさにその通りである。私たちの大野城市は観光業が盛んではないが、市民のとの「交流強化」により更なる発展が築けるのではと思う。

◆一般報告◆

①地域との新しい関わり方・関係人口

島根県立大学地域政策学部准教授・・・田中輝美氏

- ・「短期間の交流や観光」では無く、「長期間暮らし続けること」でも無い、この二つの間にある「関係人口」という新しい関わりについて紹介がされた。
- ・日本の人口は今後減少傾向になって行くので、地方同士が住人の奪い合いを行っても仕方が無い。むしろ町を面白くするなら「人口のシェア」をする事が地方では必要がある。鳥取県用瀬町は「体験と民泊もちがせ週末住人の家」を造り、週末だけのその地域で暮らす人を募っている。若い世代が中心の「週末住人」は、町のイベントに参加したり、町のマップを手書きで作成したり、屋台を開いたり週末になると用瀬町を訪れ「週末住人」活動を行っている。このように定期的に町を「ふるさと」と感じている若者が120人登録をしている。観光では短すぎ、移住となると重く感じるのので、この様なある程度の距離がとれる「週末住人」が気軽なのかも知れない。しかしその事を受け入れる自治体も、「よそ者」として関わるのではなく、「この町を選んでくれた」との意識で受け入れられる地域への理解も必要である。しかし最後に、「取りあえず誰か来ないかな」と外から人が入るのを待つではなく、今後町をどう造って行くかを考え、「選び」「受け入れ」をしていくかを、受け入れ側もしっかり考えることが重要であると結ばれていた。

②「ビジョンを活かしたまちづくり」～選ばれる山形市をめざして～

山形県山形市長・・・佐藤孝弘氏

- ・経済産業省退官後、2015年から市長を務め、現在2期目である。山形市が「選ばれるまち」として「健康医療先進都市」「文化創造都市」を紹介された。
- ・「健康医療先進都市」の取り組み・・・
山形市は人口1人当たりの診療所数が多い街であり、令和3年には東北初の次世代型重粒子線がん治療が開始され、最先端の医療が提供できる。また新たに保健所も設置し「医療」と「健康」の強みを生かして「健康医療先進都市」を長期ビジョンとして掲げている。その中の取り組みで市民の健康寿命の延伸として、食事(S)・運動(U)・休養(K)・社会(S)・禁煙・受動喫煙防止(K)に留意する「SUKSK(スクスク)生活」を推進し、医師や保健師、薬剤師、管理栄養士、歯科衛生士といった専門の知見をいかし、市民の健康に関するデータを科学的に分析し、フレイル対策や減塩事業などの取り組みを進めている。そうした中、特に力を入れていることは、日常の運動機会を増やすには「歩くこと」が基本で、居心地良く歩く「ウォーカブル推進都市」とし、令和3年から中心市街地の公開空地へ椅子やテーブルを設置し滞在空間の創出や、車両通行止めによる道路のテラス化など、既存空間の有効活用という観点からの社会実験を行っている。また冬季には積雪もあるため歩くことに制限がされるので、全国でいち早く歩道等に「地下水還元方式無散水消雪システム」を導入し、降雪時に雪が積もらない取り組みを市内での総延長は38kmまで伸ばし、「冬でも歩きやすいまち」となっている。その他、室内型児童遊戯施設「シェルターインクルーシブプレイス コパル」をオープンし、障害の有無にかかわらず、誰も分け隔てなく遊べる遊具も設置している。



・「文化創造都市」の取組み・・・

「山形国際ドキュメンタリー映画祭」が30年以上前に市民の手作りで誕生した。今ではドキュメンタリー映画祭では世界中から多くの映画ファンが募り、開催期間中はまちの風景が変わるほどである。また、国内でも上位の楽団である「山形交響楽団」のコンサートにも多くのファンが全国から訪れる。

山形市ではこれらの「文化資産」に多くの人に関わることで新たな価値を創造する「文化創造都市」の概念を広く市民へ共有すべく「山形市文化創造都市推進条例」を令和4年4月から施行している。



③「交流の産業化を支える景観まちづくり」～長崎市景観専門監の取組み～
一般社団法人地域力創造デザインセンター代表理事・・・高尾忠志氏

- ・九州大学特任準教授、長崎駅周辺の様々な事業の監修を行う。総務省地域力創造アドバイザーも勤める。
 - ・長崎市は「100年に一度のまちづくり」と呼ばれ、大規模な事業によってまちを大きく更新する時期を迎えている。100年後の長崎をより良いものとするためにも、その一つ一つの事業の質を協議し、そこに関わる1人1人の働きを丁寧に積み重ね、コーディネートすることが重要である。景観専門監に就任してから9年以上経ち、長崎駅周辺整備や、市新庁舎、出島表門整備、鍋冠山公園展望台、平和公園など、様々な事業に携わってきた。限られた予算内・工期内でどうすれば良いものができるか、職員の日々の業務の伴奏をする家庭教師の様な存在で携わってきました。職員が出した一部しか見えていない計画に平気でダメ出しをし、先人達が「何故この様な整備に至ったのか」など、目先の運営だけではなく、一步先を見た計画の実施に取り組んでいる。
 - ・「景観専門監」として取組むにあたり、
 - 一つ目の役割は、「縦割りに関すること」・・・長崎市の事業でも「長崎県」「JR九州」などがかわり、その「個々の事業目的」が最大・最適に進み全体として良いまちになるよう事業現場でのデザイン監修や事業間調整を行っている。
 - 二つ目の役割は、「時間に関する事」・・・事業の検討は、構想、計画、設計、実施、施工、管理、と様々な段階があるが人事異動等により担当者が変わることがある。しかし、一貫して関わっていくのが「景観専門監」であり、最初から最後まで「地道で一貫したデザイン調整」が行えることは良い事である。
 - 三つ目の役割は、「人材に関する事」・・・職員ひとり一人の日々の仕事の積み重ねが、まちの未来を変えていく。しかし、限られた予算、工期、管理の都合、補助金等制度の縛り、議会や庁内への説明責任など様々な関わりにより、ともすれば「創造する意識が欠落」する事がある。こうした状況に対し「景観専門監」として職員の日々の業務の伴奏者として「家庭教師的な存在」で、定期的に担当職員達と協議会を開き「問い」を投げかけ、担当職員が良い見解を見つけ出す機会を設け「当たり前のことを丁寧にやる」意識を根付かせている。
- このように、単に「景観アドバイス」だけで無く、どうすれば長崎が更に良いまちに変われるかを考えている。

所 感

・3年ぶりに参加する「全国都市問題会議」であった。全国から多くの関係者が参加し会場の熱気を感じた。今回の開催都市の「長崎市」は個人的に過去に数回訪れたことがあったが、駅周辺が大きく変化し「国際都市長崎」という表現が似合う都市であった。

・最初の講演であった「ジャパネットホールディングスの高田氏」が、民間企業として大きく現在の長崎の発展に寄与していることにまずは驚かされた。率直に企業として採算がとれるのか心配もあったが、サッカースタジアム、企業、大学などと連携をし、長期的な計画を考えていること、「市」「民間」「地域」との協力体制により成功する、との自信ではと思った。

・また、長崎市長の「田上市長」の行動と決断が、今日の長崎の発展であるとも思う。我が街の「価値に気づく」ことの、一番身近で簡単な発想を実現している、地域散策の「長崎さるく」は、本市の「大野城トレイル」にも似ているが大きな違いは、「行政主導」か「地域住民主導」かであると思う。このことは他の方も講演されていたが、「行政主導」には、限界と今までの慣習が大きな壁になり、「一步が踏み込んだ行動」が行えていないのではと思う。

大野城市市制 50 周年、西鉄高架化で本市も大きな転機を迎えているので、行政も思い切った人員の刷新や派遣を行っても考えた。

・市議会議員も2期、8年目に入ったが、更なる研鑽と行動を行う必要があると改めて感じさせられた。

-作成者 河村 康之-

視察・研修報告書

視察・研修先	第84回「全国都市問題会議」
日時	令和4年10月14日
場所	長崎市「出島メッセ長崎」
テーマ	個性を生かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～
対応者 (講師)	東京都立大学法学部教授(大杉 覚氏) ゆとり研究所所長(野口 智子氏) 山梨大学生命環境学部教授(田中 敦氏) NPO法人長崎コンプラドール理事長(桐野 耕一氏) 飛騨市長(都竹 淳也氏) 伊丹市長(藤原 保幸氏)
<p>概要</p> <p>10月14日 出島メッセ長崎において 個性を生かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～の題材を基にしてパネルディスカッションが行われ、各パネラーが持論を展開した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「<u>選ばれる</u>」まちづくりに向けた都市自治体のアプローチ (大杉 覚 氏) 「選ばれる」まちづくりを考える際、地域価値は、地域づくりの“根っこ”にあたるその地域での暮らしぶりや地域資源のありようと相互に影響を与え合ってきた関係。 A「観光立地型」 自然や名所・旧跡・温泉や公園をはじめとする集客施設、食、祭りや芸能など新旧さまざまな観光資源を目玉に不特定多数の観光客を集客してきた。しかしどれだけ素晴らしい観光資源を擁していても1回味わえば十分であれば「選ばれ続ける」ことは難しい。 B「観光政策型」 旧来観光資源とみなさなかつた新たな資源の掘り起こし(地域芸術祭・工場夜景の見学ツアー)、グリーンツーリズムや田舎暮らし体験などの体験型観光 C「プラスワン拠点型」 田舎暮らし移住・2拠点、多拠点居住、シェアオフィスなど <p>まとめとして、「選び続けられる」まちであるためには、訪れる人々にその都市ならではの独自の戦略でその地域価値を享受できるかがポイントである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>人が人を磨き、輝く人が人を呼ぶ</u> ～「雲仙人(くもせんにな)プロジェクト」の試み～ (野口 智子 氏) 雲仙市では「温泉・観光地・農業・漁業」などに地域おこしをそれぞれが取り組んでいたが、そこに住んでいる人々に「つながり」がなかった。そこで「雲仙人(くもせんにな)プロジェクト」人が集まってお互いを知り合う場所をつくり、それぞれが講師となって毎月ゆるい集まりを開催した。自分の住んでいる地域を愛する人たちが集まり、出来ることを探す人たちが深く知り合うと化学反応が起きる。人と人がいい出会いをされるといい変化が起きる。そういう変化をしていく人がたくさんいる町こそが魅力あるまちだと思う。 ・<u>ワーケーションの意味の拡張と変異</u> (田中 敦 氏) ワーケーションとは「仕事(work)と休暇(vacation)を組み合わせた造語であり、テレワークの活用などにより、リゾート地や地方等の職場とは違う場所で働きながら休暇取得する、または休暇取得中に仕事をするをいう。企業のワーケーション導入の障壁として、「労務管理」「情報セキュリティ」「経営層・上司の理解」「導入メリ 	

ット」などがある。コロナ禍の副産物として生まれた新たな価値観や生活パターンが、旅と居住、仕事とプライベート、都心と地方、の境界をなくしワーク&ライフスタイルの変革を加速させ、個人・自治体・企業の取り組みが地方創生のポイントとなる。

・ 人は人に会いに行く！

～「まち歩き」で見つけた“まちのつくり方”～ (桐野 耕一 氏)

「長崎さるく博の開催」

今までの観光スタイルは、団体客を対象にバスで観光地巡りが主流だったが、団体旅行から個人旅行、物見遊山から体験型、男性主体から女性主体に変化してきた。

長崎さるく博は212日間の期間中723万人が参加、日本のまち歩き観光の手本となる。まちの良さを伝えるには自分が誰よりもまちを愛すること。暮らしているまちを歩くことで我がまちの良さに気づき、訪れた人とともにまちを見つめる。まち歩きはまちづくり。

・ 人口減少先進地の挑戦～ファンと共に取り組むまちづくり～ (都竹 淳也 氏)

・ 人口2万2700人で全国の倍のスピードで人口減少が進んでいる。高齢化率も40%、頼りになるのは地域外の方である。移住はしなくても、こころを寄せ、力を貸してくださる方々と交流を深めることが必ず地域の力になると信じて、2017年1月に「飛騨市ファンクラブ」を設立する。2022年現在会員数は9900人を突破し人口の約半数に迫る勢いである。

・ ファンクラブから生まれた「関係人口」：観光客以上、移住者未満と定義され地域と多様に関わる人々のこと

・ 飛騨市を手伝い関わりを持っていただく「ヒダスケ」の設立

・ 清酒発祥の地・伊丹 ～酒と文化が薫るまち～ (藤原 保幸 氏)

清酒づくりで紡がれた歴史・文化だけでなく、コウノトリ、アオバズクなど野鳥が飛び交う「昆陽池公園」や、飛行機の離発着が見られる「伊丹スカイパーク」、蛍が飛び交う猪名川など自然が身近に存在する一方、子育て通勤など日常生活の利便性も優れている。伊丹のまちの魅力は日々市民の手によって、培われており、まちを盛り上げている主役は市民である。まちが将来にわたって発展していくために、市民主体のまちづくりを進めていくことが重要である。

所 感

個性を生かして「選ばれる」まちづくり ～何度も訪れたい場所になるために～をテーマに討議が行われ、地域それぞれの持つ特性、個性はそれぞれに違うと感じた。その地域の独自性をもってまた、地域愛の熱量によって「選ばれるまち」になると感じた。特に「まち歩き」で見つけたまちのつくり方では、我がまちを歩くことで我がまちの良さを再発見すること、自身の感動を訪れた人と共有できた時、更なる感動を呼ぶこと、また、人が人を磨く「雲仙人プロジェクト」では、地域のためにとの熱き情熱と情熱がぶつかったとき新しい何かが生まれるのだとつくづく思った。

-作成者 神田 徳良 -

視察・研修報告書

視察・研修先	長崎市恐竜博物館(視察) 軍艦島資料館(視察)
日時	令和4年10月14日(金) 12:10~17:00
場所	長崎市恐竜博物館 軍艦島資料館
テーマ	長崎の歴史 白亜紀から近代文化で新しい賑わい創出
対応者(講師)	野母崎三和漁業協同組合 組合長 岡部 聖二氏 その他2名
概要	
<p>1. 概要</p> <p>○長崎のもぎき恐竜パークを中心とした長崎市南部に、新たな変化が進んでいる。国内で初めて発見されたティラノサウルス科大型種の化石など、他では見られない長崎市産の恐竜をテーマとし、石炭ができた時代を経て現代に至るまでの長崎市特有のストーリーを活かした博物館である。</p> <p>世界文化遺産に認定された、炭鉱の島「軍艦島(端島)」は、地下600mより深い海底で緊張感あふれる当時の作業の様子や人々の生活風景。軍艦島の歴史や文化、日本の近代化に貢献した役割など、他に類を見ない多様な魅力を、パネル展示や映像などで体感できる。また、ムービーコーナーでは「軍艦島・明治日本の産業革命遺産」を最新の4K映像で視聴することができる。</p> <p>2. 長崎市恐竜博物館について</p> <p>○恐竜に特化した博物館としては、福井県立恐竜博物館(福井県勝山市)、御船町恐竜博物館(熊本県御船町)に続いて国内3か所目である。</p> <p>○博物館は鉄筋一部2階建てで、延べ床面積約2600平方メートル。肉食恐竜「ティラノサウルス」の化石の全身骨格レプリカ(全長約13メートル)や、羽毛やうろこを再現して鳴き声も発する恐竜ロボットのほか、長崎で発掘された化石も数多く並ぶ。</p> <p>3. 長崎市軍艦島資料館について</p> <p>○2008年12月14日に「軍艦島資料館」野母崎町の物産センター横にリニューアルオープンした。現在写真及びパネルを過去・現在と200点ほど展示している。野母崎からの軍艦島を見たあとはここで更なる軍艦島(端島)を探索するコースとなっている。</p>	
所感	
<p>○説明された野母崎漁業組合長は、南部全体の急激な人口減少に危機感を感じ、野母崎商工会青年部と協議を重ねてきたそうだ。長崎市南部全体に人の流れを作り、子どもたちに多くの夢を与え、賑わいを創出できる期待感を持てた。また、資料館から見る軍艦島や恐竜はとても幻想的であった。</p> <p>○当時の軍艦島の生活が資料館に展示されており、今後もさまざまな軍艦島の資料を展示していく予定だそうだ。</p>	
-作成者 大塚 みどり-	